

■特集■ 座談会 ■

新文化庁長官 **宮田亮平氏を囲んで**—  
**これからの文化政策と  
関西経済界の取り組み**

**文** 化庁の京都移転や、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムの全国展開など、関西・大阪は、今まさに文化によって活性化を推進する絶好の機会にある。今回は、今年4月1日に文化庁長官に就任された宮田亮平氏から、今後の文化政策に対する考えを伺うとともに、日本の文化力向上に平素取り組んでいる関西の企業トップの方々と、これからの文化振興のありかたについて語り合っていた。

● アートコーポレーション株式会社  
代表取締役社長  
**寺田千代乃氏**  
(公益社団法人関西経済連合会 都市創造・  
文化観光委員会 担当副会長)

● サントリーホールディングス株式会社  
代表取締役副会長  
**鳥井信吾氏**  
(大阪商工会議所 副会頭、スポーツ・  
文化振興特別委員会 委員長)



文化庁長官  
**宮田亮平氏**  
(前東京藝術大学学長、金工作家)



## 文化の行商人・3つの輪

**堀井** 宮田長官にはご就任早々のお忙しいなか、大阪にお越しいただき誠にありがとうございます。今日は、関西・大阪でご活躍の経済界のトップの方々と共に、関西から日本の文化力を向上させる方策などについて意見を交わしたいと思います。まずは宮田長官から、これからの日本の文化政策に対するお考えをお聞かせください。

**宮田** お招きいただきありがとうございます。私は、文化と経済は両輪の関係にあるべきだと考えていますが、これに加えて、感性に基づくサイエンスも必要だと思っています。文化とは、アーツとマネジメントとサイエンスの“3つの輪”のバランスの良い関係によって、生きたものになるということです。例えば工業製品で、性能や使い勝手がいくら優れていても、見た目の美しさが備わっていなければ市場競争で勝ち残ることができません。寺田さんの会社も、引越しや物流というサービスに、今まで以上の「安心・安全」という高い付加価値を付

けられたことで、多くの顧客の支持・共感を得ておられます。これこそは文化であり、日本人の力のなせる技です。その意味で、東京の機能性や情報発信力と関西の伝統の中で培ってきた文化や企業家精神を融合させることで、日本の魅力が大いに発揮され、ひいては国の発展にもつながっていくと思います。

東京藝術大学の学長時代、私の仕事は「芸術の行商人」だと宣言しました。芸術を伝えるためには、人が来るのを待っているのではなく、自分から持っていかなければならないという考えです。そこで東京藝術大学は、企業と協力して「クローン文化財」といわれる高精度な複製技術を開発し、法隆寺の釈迦三尊像を完全に復元しました。この技術を使えば、門外不出の文化財でも世界各地でご覧いただけるようになり、日本文化の素晴らしさを、今まで以上にアピールできます。今も“文化の行商人”として、文化庁のさまざまな取り組みを国内外の多くの人に知ってほしいと思っています。そ

のためには新聞やテレビといったメディアの方々との意見交換をしたり、例えば「日本遺産事業」などを記事や番組で取り上げてもらえる機会を増やそうと思っています。メディアの影響力は大きく、今春、東京都美術館で開催した「若冲展」は、NHKの「日曜美術館」や「美の壺」に取り上げられたこともあって人気に火がつき、連日入場待ちの長い列ができました。

また、東京藝術大学では、平成28年度からグローバル人材育成機能の強化を図るべく大学院に「国際芸術創造研究科」を設置し、キュレーターの長谷川祐子さんを教授に招き入れました。すると、これを知ったフランス大使館が、すぐさま彼女に芸術文化勲章を授与しました(註：長谷川氏は世界各地のビエンナーレでキュレーターを務めた実績などから文化庁文化交流使に任命され、パリを拠点にアーティストの国際交流に先駆的役割を果たした)。フランスは人を顕彰するのが実にうまいですね。鳥井さんの会社も「サントリー地域文化賞」を設けて地域発展の功労者を顕彰しておられます。私は、こうした若い人に夢を与える顕彰は必要だし、文化庁の大事な仕事だと思っています。

株式会社 三井住友銀行  
取締役副会長

**蔭山秀一氏**

(一般社団法人関西経済同友会 代表幹事)

司会  
公益財団法人関西・大阪21世紀協会  
理事長

**堀井良殷**



# 「文化と経済と科学の良いバランスが 生きた文化をつくる」

宮田氏

文化庁の関西への移転が決まったし、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けた文化プログラムも始まるし、関西は今、文化、スポーツ、ツーリズムの絶好のチャンスが訪れたと感じます。この機会に関西の素晴らしさを力強く発信し、競争力を高めるために、とくに経済界の方々には文化プログラムの推進など、積極的なご参加をいただきたいと思っています。

**堀井** とても希望が持てるお話をいただき、嬉しく思います。これからは皆様ご自由にご発言いただきたいのですが、まずは、「はなやか関西」など関西のブランディング活動の火付け役である寺田さんは、今の宮田長官のお話を聞きになっていかがでしょうか。

## 関西のブランディング活動

**寺田** 宮田長官には関西への熱い思いとエールをお送りいただき、とても心強い思いをいたしました。関西では、これまで10年以上にわたって、経済界などが中心になって大阪・関西の地域文化のブランディング活動に取り組んできました。発端は大阪のブランド力アップを目的とした「大阪ブランドコミティ(2004~06年)」\*1の活動です。その後、この経験を活かして、関西経済連合会において関西地域の10府県で「はなやか関西(2009年~)」というブランディングコンセプトを立て、官民一体となった地域ブランドの向上活動を始めました。2014年には活動のシンボルマークをつくり、関西広域のインバウンド促進に向けて、外国人旅行者向けのホームページや印刷物などに使用しています。ピンバッジもつくりましたので、ぜひ宮田長官にご覧いただきたいと思います。

**宮田** (バッジの図柄を見て)これはすごい。鯖江市のメガネに熊野古道、いろんなものが入ってる。

**寺田** そうなんです。この小さなバッジに22の関西ブランドがデザインされていて、皆さん驚かれます。「はなやか関西」に込めた思いのひとつに、“歴史・文化と共に生きる関西”というのがあります。関西では2010年に関西広域連合が発足し、防災面や観光面での連携は進んでいます。今後は、文化庁も推進されているように文化による広域連携を是非進めていきたいと考えています。



「はなやか関西」ピンバッジ

**堀井** 関西経済連合会が「はなやか関西」を推進される一方で、関西経済同友会は、文化で地域を活性化する方策を探るため、鳥井さんを委員長とする「歴史・文化振興委員会」を設置し、イギリスの文化政策を研究しました。とりわけスコットランドの文化政策が参考になるとして、2011年に同委員会で現地を視察し、スコットランドの芸術文化産業を振興・支援する「クリエイティブ・スコットランド」や「アーツカウンシル」などをヒヤリングしました。

## “文化宝くじ”という起爆剤

**鳥井** イギリスには文化活動への助成金を預かり配分する「アーツカウンシル」という第三者機関があります。予算は1,200億円で、助成を受ける団体の規模や文化への貢献度などを評価して配分されますが、それに関して出資者である政府は口出しをしてはいけなくなっています。また、予算の内訳は67%が政府の助成金で、33%が宝くじの収入です。つまり、宝くじによって400億円もの収入があり、これをすべて文化振興に使い切ることができるんです。私は、この手法に大いに学ぶべきものがあると思いました。

**堀井** 大阪でも「近畿宝くじ」の収益金が「大阪マラソン」や「大阪・光の饗宴」などに配分されていますね。そこで思うのですが、収益金の使い道を文化振興に限定した、いわば“文化宝くじ”を新しく発行してはどうでしょうか。

**宮田** それはいいアイデアですね。関西広域連合の力も借りて、宝くじ全体の売り上げ向上に寄与するという名目が立てば、文化宝くじ案も前進するでしょう。もちろん文化振興は宝くじだけではなく、寄付文化を醸成することと合わせて考えていただきたいです。

**蔭山** いいですね、“関西広域文化宝くじ”。“文化庁関西移転記念宝くじ”はいかがですか(笑)。近年、アベノミクスが叫ばれていますが、庶民にとっては景気浮揚の実感に乏しく、文化が大事だと分かっても財布のひもは固い。企業も資金に余裕がない。そうした状況にあって、宝くじは遊び心もあって、文化振興を前進させる起爆剤になりますね。

## 国の呼びかけに民が立ち上る

**蔭山** 関西では、鳥井さんが関西経済同友会の代表幹事をされていた2014年に、「アーツサポート関西(運営委員長:鳥井信吾氏)」という民間の文化支援組織を立ち上げました。市民や民間企業の寄付で関西の伝統的な文化を守ったり、若手アーティストの育成をめざすものです。大阪府及び大阪市が行政予算で行う「大阪アーツカウンシル」とは一線を画し、こちらは支援するジャンルや団体の活動などを指定でき、支援者の思いを自由かつダイレクトに届けています。例えば伝統芸能の文楽を支援する目的で、学生がワンコイン

(500円)で文楽を鑑賞できるよう、人形浄瑠璃文楽座への寄付がありました(注:京阪神ビルディング文楽支援基金)。また、1社だけで支援を続けるのはしんどいですから、各企業がリレー形式で数年にわたり支援を続けようという企画もあります。

**堀井** 昨年从天満天神繁昌亭で実施されている「上方落語若手噺家グランプリ」は、寺田さん個人の寄付で実現しましたね。

**寺田** 10年間にわたって若手噺家に賞を出す取り組みです。4日間の予選は、すべて満席で、今年は笑福亭たまさんがグランプリを受賞されました。

**蔭山** そうした寄付に加えて、アーツサポート関西では、サントリーさんのご協力もあって、昨年から「寄付型自動販売機」を設置することとなりました。自販機のオーナーさんをお願いして、飲料水の売り上げの一部を文化支援に寄付していただくものです。わざわざ銀行へ足を運んで寄付していただく手間が省けますし、これが普及すれば継続的かつ多くの寄付が見込めます。大阪人らしい合理的な発想ですね。

**鳥井** 行政の政策は公平性の原則が働きますから、文化予算の用途についても杓子定規で融通が効きにくくなります。ですから公と民で文化支援のあり方を線引きして、行政は公平性の原則で、一方、民はメリハリの効いた助成を組み合わせる。公は金を出しても、むしろ民に自由にやらしてもらわないと、本当の文化は発展しません。

**堀井** 国の文化政策の予算は大部分が地方自治体を通して民に流れてきますが、自治体によって文化行政に対するスタンスはまちまちです。文化予算が大きく削減されてきた大阪では、せめてもの努力として、タニマチ的な風土・気質から民によるアーツサポート関西が生まれました。文化振興について国(文化庁)の予算に直接民間が応募できるラインがあればどんなに良いかと希望しています。



上方落語若手噺家グランプリ表彰式

## 「食博など、関西の多彩な文化を広く発信する絶好のチャンス」 蔭山氏



域活性化・国際発信推進事業」の採択一覧を見ると、大阪府は1,353万円で、滋賀県(6,141万円)、京都府(1億9,380万円)、兵庫県(4,607万円)、奈良県(6,500万円)、鳥取県(5,070万円)、徳島県(7,043万円)に比べて格段に少ない。悲しいかな、私たちが行政に対して、「もっと国に申請してほしい」と訴えなければならぬような状況です。また、大阪府の採択額を府民一人あたりに換算すると、わずか80円です。これはあんまりですので、関西経済同友会は「脱・80円文化政策」という緊急アピールを考えているところです。

**寺田** 文化振興の官民協働の取り組みは、京都のほうが格段に進んでいますね。大阪府・市は文楽への補助金削減問題に象徴されるように、残念ながら文化振興への取り組みは弱いと言わざるを得ません。蔭山さんが示された通り、せっかく国が助成してくれるというのに、大阪府・市への採択事業が他の都道府県に比べて非常に少ないのは、新たに文化政策を広げようという意思が低いことの表れのように感じます。行政に期待するのが難しいのであれば、公益法人やNPOが直接国に申請するしかありません。

**宮田** 文化振興について国と民間が直接コンタクトするというご提案は、もっともだと思います。私は文化庁長官に就任したときの職員への挨拶で、毎日書類ばかりとらめっこするのではなく、もっと現場に出て、生きた情報交換をすることを奨励しました。私は文化庁と民間がもっと情報共有し、連携して良いと思います。国によっては公共建築費用の1%を芸術・文化関連に充当するという「1% for Arts」が制度化されています。日本でもこうした取り組みを進めたいと思っています。そうすれば、日本の文化振興は一気に前進するでしょう。先ほどの寄付型自販機のお話は、その民間版のようなもので、とてもいい取り組みですね。

**蔭山** 堀井さんが「自治体によって文化行政に対するスタンスはまちまち」とおっしゃる通り、文化庁が発表した平成28年度の「文化芸術による地

# 「大阪城を活かした舞台芸術の祭典で 大阪を文化の都に」

鳥井氏

## 2020年を超えて

**宮田** 現在、2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、さまざまな文化プログラムに取り組んでいます。東京大会の文化プログラムは、ロンドン大会を大きく上回る全国津々浦々で20万件を目標にしており、それに伴う経済効果もあげたい。関西でも、だれかがリーダーシップをとって組織的に取り組む気運を高めていただきたいと思います。

**寺田** 関西広域連合や関西経済連合会、関西・大阪21世紀協会などが幹事となって、今年、「はなやか関西文化戦略会議」が設けられました。私はその委員ですが、関西としてまとまった文化プログラムを行うのは、いまだ検討段階といったところです。

**堀井** 関西経済同友会では、蔭山さんを委員長として「関西2019・20・21委員会」を設置され、オリンピック文化プログラムを重要な柱のひとつにされています。

**蔭山** 関西では2019年にラグビーワールドカップ、2021年に関西ワールドマスターズゲームズと、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを挟んで大きなスポーツイベントの開催が予定されています。国の観光政策によってインバウンドが急増する今、この3大スポーツイベントをオール関西で盛り上げ、関西の多彩な文化を広く発信する絶好のチャンスです。そして2020年以降も文化の諸活動を広げ、関西全体の持続的な活性化につなげていくべきだと思います。

**宮田** 東京オリンピック・パラリンピックが終わっても、文化プログラムの火を消さないでほしいですね。ぜひ2020年以降も続けていただくよう期待します。

**鳥井** 文化プログラムのレガシーを次代に引き継ぐためには、文化をプロデュースする人材を育て、地域の歴史や文化をストーリー化して発信することが大事だと思います。先ほど、関西経済同友会の歴史・文化振興委員会でイギリスの文化政策を視察したお話をしましたが、その時、スコットランドの首都であるエディンバラで開催される「エディンバラフェスティバル」も視察しました。エディンバラでは、1年を通じて音楽やアートなど12のフェスティバルが行われます。8月はそのピークを迎え、町のシンボルであるエディンバラ城を中心に、演劇や音楽、ダンスなど、さまざまなフェスティバルが同時開催されます。これが世界的に有名な「エディンバラフェスティバル」です。期間中は人口48万人の町が観光客などで100万人に膨れ、約175億円の経済効果と5,420件の雇用が創出されるそうです。国際的な知名度も高く、世界中から約2万人のアーティストと2,000人のメディア関係者が集まり1,000人近いプロデューサーが新人発掘のためにやってきます。また、こうした集客力を目当てに、さまざまな自主公演のフリンジ（周辺イベント）が行われます。フリンジは誰でも参加できるのですが、非常にレベルが高く、フリンジを楽しみに来るファンも

多い。一流のアーティストでも、この路上パフォーマンスに出たいというほどです。このエディンバラフェスティバルをモデルにして、大阪で舞台芸術の祭典を行うのもおもしろいかもしれません。エディンバラフェスティバルが「エディンバラ城」を中心に開催されたように、大阪では、文化レガシーの象徴ともいえるべき「大阪城」をコアにして、フリンジを膨らませる。大阪にはストリートダンスのチームが多く、レベルの高い路上パフォーマーも多い。そうしたアーティストをプロデュースできる人材育成は不可欠ですね。とにかく、海外からの観光客に関西の何を見せるのか。ヨーロッパの歴史は皆知っているが、日本の歴史は難しい。歴史的建物だけでなく、そこにあるのは生きたフェスティバル、伝統的な祭りも含めた「大阪城フェスティバル」がキーになると思う。

**蔭山** 関西経済同友会の芸術・文化委員会でも、文化プログラムについて話し合っており、実にさまざまな意見や提案が出されて収拾がつかないほどです。例えば、関西には長い歴史をもつ企業が多く、中には彫刻や絵画などの稀少な美術品を持っている会社も多い。そこで、それを集めて展覧会をしたらどうかというアイデアがあります。しかし、美術館への運搬費用や保険代を見積もったら多額になることがわかり、今度は各企業を会場にすればどうかという意見が出されました。また、大阪では毎年夏に、エディンバラ城よろしく大阪城を中心とした「大阪城フェスティバル」を開催していますし、来年4月には4年に1度の「食博覧会・大阪」が開催されます。総事業費は10億円を超える規模です。これらをゼロから立ち上げるとなると負担が大きすぎますが、企業が持っている文化財を活用したり、既存の行事や催事をブラッシュアップす



エディンバラ城（スコットランド）



大阪城サマーフェスティバル  
(2012年・大阪城西の丸ステージ)

れば、強力な文化プログラムとして、しかも継続開催できます。和食がユネスコの世界無形文化遺産になったことで世界的にも注目されています。4年に一度ですから、次は2021年で、2020年

の東京オリンピック・パラリンピック以降も続いて発信していきます。この「大阪城フェスティバル」と「食博覧会・大阪」は、関西・大阪の重要な文化プログラムではないでしょうか。

**宮田** 既存の文化財やイベントをブラッシュアップすることは、関西にそれだけ多彩で歴史に培われた文化があるという証拠ですね。外国に行くのと改めて日本文化の素晴らしさに気付くように、関西に根付いている文化を文化プログラムに活用することで、地域の方々が改めて自分たちの文化の素晴らしさを知る良いきっかけにもなるでしょう。

**蔭山** 関西には美術館や博物館が多く、場所によっては近接しているところもあり、それらをハシゴして楽しむことも可能です。そうした美術館や博物館が共同で一つのテーマやストーリーをつくり、回遊して楽しめるようにしてもいいですね。

**宮田** 東京でそれをしたことがあります。私が東京藝術大学の学長時代に文化庁と共同で立ち上げた、「上野[文化の杜]新構想」です。上野公園を中心とした一帯には、博物館や美術館、動物園など日本有数の文化施設が集積しており、それらの共通パスポートを作ったんです。そうして1館だと1,500円ぐらい入館料がかかるところを、800~1,000円程度で入館できるようにしたところ、大好評でした。この共通パスポートを開発したことで、各文化施設で連携した企画も生まれ、その相乗効果で入館者増につながりました。その結果、年間1,200万人程度だった上野地区の文化施設への有料入館者が、一気に2,000万人ぐらいに増えたんです。直近の例では、東京国立博物館でバーミヤン展をしているときに、東京藝術大学の美術館で東京国立博物館とは違う観点でバーミヤンを紹介する企画を打ちました。そうすると、どちらのバーミヤンも楽しめるし、楽しみ方も広がります。東京国立博物館が混雑していたら、東京藝術大学の美術館を先に見て、東京国立博物館が空いたころを見計らってそちらに行くといった融通も効く。今年は、ル・コ

ルビジェの建築作品が2016年の世界文化遺産に登録される見通しとなったことも、入場者増の追い風となっています(注：上野の国立西洋美術館はル・コルビジェの設計、7月17日登録

決定)。今後は海外の人たちへの情報発信も考えて、Wi-Fi(無線LANを利用したインターネット接続サービス)やポータルサイトも導入しようということになりました。これは東京の一例ですが、既存のものを有効活用するために、こうしたアイデアを出していくことは必要です。

## 文化庁関西移転の意義

**宮田** 文化庁の庁舎は京都に移転されますが、私どもは「関西に行くぞ」という意気込みで臨んでいます。たしかに京都には日本の伝統文化がたくさんありますが、それだけ守るのが文化庁ではありません。そもそも文化財を保護するだけなら、支局を出せば済む話です。本庁を移すとなると、それだけではない新たな目的が必要です。すなわち、日本の文化の発祥の地ともいえるべき関西に基軸をおくことで、日本が本来持つ文化の力を大いに発揮し、ひいては地方から日本全体を活性化させ、経済力の発展にもつなげていくことです。こうして将来の文化を考えた新しい取り組みを行うことによって、日本で生きていることにプライドを持てるような環境づくりにもつなげたい。そのためには民間活力を積極的に受け入れていくことと同時に、民間の活動に対して文化庁がお墨付きを出すことも大事な仕事だと思っています。

**寺田** 冒頭、宮田長官が「若い人に夢を与える顕彰は必要かつ大事なことだ」とお話しされましたが、当社でも従業員に夢や目標を聞くと、当社でいうところの「リーダー賞」をとることだと答える人が多くいます。私がアーツサポート関西を通して支援している「上方落語若手噺家グランプリ」でも、若手の噺家さんはタイトルをとることをすごく励みにされていて、真剣そのものです。顕彰は個人のプライドを高めると同時に全体のレベルアップにもつながるため、私も非常に大事なことだと思います。民活に対するお墨付きも励みになります。

**鳥井** 褒められて怒る人はいませんからね。寺田さんがおっしゃるような動機付けは大事だと思います。

**蔭山** もともと関西の経済人は、文化庁の関西移転について、官庁が一つ移転してきたという話で済ませてはいけないう認識もっています。今、あらためて宮田長官から関西移転の意義をお聞きして、心強い思いをすると同時に、私たちが何かしなければいけないと強く思いました。

**宮田** 関西の経済界の方々には、私どもをととても歓迎してくださり感謝しています。

## 「文化庁が関西で考え 関西で決める意義はととても大きい」

寺田氏

# 「関西の文化振興運動をオーケストレーションで」

堀井

**寺田** 文化庁の関西移転には、大きな期待を持っています。文化政策に限らず、これまでは「東京」で考え「東京」で決めるのが当たり前とされ、「中央」対「地域」という構図がありました。しかし、これからは地域が世界と直結する時代を迎えます。そうした意味で、文化庁が「関西」で考え「関西」で決める意義はとても大きいと思います。また、今年3月に関西広域連合や関西経済

連合会など関西の官民約60団体がまとめ、「関西国際観光推進本部」が発足しました。文化は観光振興を支える力でもありますから、文化庁の関西移転を好機ととらえ、先行する京都の動きのみに頼るのではなく、文化庁と関西経済界が一体となって、関西の文化政策の長期ビジョンを作っていく動きになればいいと考えています。

**蔭山** 関西国際観光推進本部が設置され、関西ワールドマスタースターズゲームズや「食博覧会・大阪」を控えた今、文化は、関西が結束する格好のコンテンツですね。

**寺田** 今年1月7日発行のニューヨークタイムズに「2016年に行くべき世界の52か所」という記事があり、日本では唯一“Kansai”がランキングされました。京都でも、大阪でも、神戸でもなく、「関西」という地域名が取り上げられたんです。これまで外国の人に“Kansai”といってもピンときてもらえませんでしたから、やっとここまでできたかという印象を持ちました。近ごろは、官公庁でも「近畿」を「関西」に言い換えられているところも増えてきたようです。

**宮田** 外国には「関西」という呼び名をもっと知らしめたいですね。

**鳥井** これまでの文化政策は、国から地方自治体を經由して民に行くという構図でしたが、文化庁の関西移転を機に、

国から民に直接働きかける民間活力をさらに活かした文化政策を推進していただければと思いますし、私たちもそれに応えていければと思います。

**堀井** 武士の文化は上意下達で、権力トップから雨だれ式に指示系統が下りるクリスマスツリーのようなスタイルなのに対し、関西は水平的なネットワークの文化だと言えるでしょう。大阪大学の西尾章治郎総長は、阪大がもつ多様な「知」を連携させ（協奏）、共に創出（共創）することで、社会や世界に還元する「知の協奏と共創」というビジョンを示されました。私は、この考えは、関西の文化振興システムにもぴったり当てはまると思います。オーケストラがバイオリンやトランペットなど音色の異なる楽器の協奏によって感動的なハーモニーを創り出すように、関西の文化振興運動には、そうした水平ネットワークのオーケストレーションがふさわしいと思います。是非、宮田長官には、協奏と共創の力強いタクトを振っていただきたいと願っています。本日はどうもありがとうございました。

(2016年6月／大阪市内にて)

## \*1 大阪ブランドコミッティ

2003年に大阪府企画調整部の呼びかけで、大阪の魅力や強みを国内外に発信し、大阪のイメージ向上と産業や経済の活性化につなげる官民協働プロジェクト「大阪ブランド戦略検討委員会（委員長：堀井良殷）」が発足。翌04年に提言書「Brand-New Osaka」を採択して活動は一旦区切りをつけたが、当時、関西経済同友会代表幹事だった寺田千代乃氏が「大阪のブランディング運動は提言書を採択して終わるのではなく、今後も継続してオール大阪で取り組むべき問題である」とし、この運動に毎年1,000万円ずつ3年間で3,000万円の私財を投じて取り組む意向を表明。これに行政が同調し、大阪府と大阪市がそれぞれ同額を出資して年間3,000万円の活動費をもって「大阪ブランドコミッティ」を立ち上げ、2004～06年にかけて、大阪をブランディングするさまざまな活動を行った。



## 第22代文化庁長官 宮田亮平氏プロフィール

金工作家。新潟県佐渡に蠟型鑄金作家の2代目宮田藍堂の3男として生まれる。イルカをモチーフとした「シュプリング」シリーズなどの作品で、「宮田亮平展」をはじめとして、国内外で多数の展覧会に参加。「日展」および「日本現代工芸美術展」にて内閣総理大臣賞など数々の賞を受賞し、2012年に日本芸術院賞を受賞。東京藝術大学の学長を10年務めた後、2016年4月より文化庁長官に就任。